

究極の響きを求めて
ピアノ調律技術者に聞く

百通りあったとしても お客様の理想の音に近づきたい

第38回 加藤文博さん
埼玉・株式会社和幸/和幸楽器



調律のスタイルは技術者によってさまざま加藤さんは椅子に座って調律するスタイル。空气中に伝わる音の波を耳で感じとります。4人きょうだいの末で上3人はピアノを習い、同じが嫌であえてバイオリンを選んだという加藤さん。おかげで耳が鍛えられたのかもしれない。

隣同士の音の表情をそろえる

「pp から ff まで透明感があり淀みなく、すべての鍵盤でばらつきなく、音色に一貫性があるバランスがいいピアノ」が理想という加藤さん。「その基本があって、奏者によって異なる何通りもの要求に応えられるのでは」と語ります。鍵盤を下ろす左手、アクションの手前側、チューニングハンマーで調律する右手が写真一枚に収まりました(写真上)。下げた鍵盤の先、アクションの手前に、繊細な動きの一部が見えます(写真左)。



県の主要ホールで
保守点検・調律を担当

和幸楽器は、埼玉県さいたま市、越谷市、熊谷市を拠点に楽器販売店舗とヤマハ音楽教室を展開し、音楽を学ぶことの意義を広く普及。県内の主要ホールである彩の国さいたま芸術劇場や大宮ソニックシティ、県内で唯一CFXを導入しているウエスタ川越のハウスピアノ保守点検も担っています。

「芸術劇場にCFⅢSが導入されてから管理を担当して20年、2015年に開館したウエスタ川越は4年が経ちCFXがとてもしい音で鳴っています。ウエスタ川越は1700名収容の大ホールですが、音響担当者に『後ろの客席までCFXの音はとてもしい音で飛んでくる』と言っていたとき、うれしく思っています」

2001年にもう一人のスタッフと芸術劇場の保守と調律を始めた加藤文博さんですが、ヤマハピアノテクニカルアカデミーのコンサートコースを修了すると同時にこの抜擢でした。「身に余るような状況ができ上がっていて、自分がそれに追いついていった感じです。緊張はしましたが、ホールのコンサートの休憩時間

に舞台上に
がって手直
しするとき

など、時間のないなか土壇場で落ち着く性分なんです」と振り返ります。見事に期待に応え、現在はピアノ調律技術者9名を率いる責任者です。

独りよがりならず
お客様の目線に立つ

育休中のスタッフも含め、女性の技術者も多い和幸楽器、近年は女性を指名するユーザーも増えています。

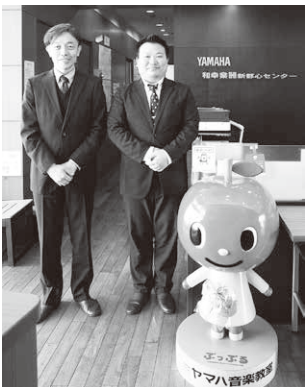
「私たち調律技術者の仕事は、お家にとって特別だという自覚が必要です。スタッフには、訪問時の靴の脱ぎ履き、道具バッグをどこへ置けばいいかという立ち居振る舞いから、お客様の目線に立って考えるよう話しています。特に音というのは目に見えるものではないので、わかりやすい説明が求められます。初めてのお客様に、美しく精密な部品が並んでいるピアノの中を見ていただくとても驚かれ

受けた1カ月でした。トライ&エラーの連続で、毎日テストがあります。あの時ばかりは緊張の連続でした」

そんな加藤さんにとって、ヤマハのピアノは、「音が華やかで聴いていて明るい気持ちになります。木材のシーズンングも十分に狂いが少なく整った状態なので、技術者にとっては扱いやすいピアノです」。

調律技術者として30年以上、コンサートチューナーとして20年の加藤さん、何よりもお客様の喜ぶ笑顔を糧に、ピアノと向き合う日々が続きます。

「ホールであればすみずみまで音を届け、家のピアノではお部屋にマッチした音を作れる調律師になりたいです。私たちは主役ではなく黒子。百通りでも千通りでも答えを見つけて、お客様の理想の音に近づきたい。見果てぬ夢かもしれません」



取材はイオンモール与野の近くになる「新都心センター」で。左から加藤さん、和幸大宮店店長の荻野剛史さん。



加藤文博(かとう・たけひろ)

1967(昭和42)年、東京都出身。就業3年目より埼玉県川越市に引っ越し現在は上尾市在住。小学校時代にバイオリンを習い、中学では吹奏楽部でトランペットを担当。高校卒業後、調律師を目指し専門学校で学ぶ。20歳で和幸楽器に就職。現在は、社員5名、嘱託4名の調律技術部門の責任者。2001年ヤマハピアノテクニカルアカデミー コンサートコース修了。県内主要ホールの保守点検、調律を担当。今年から復活する「埼玉ピアノコンクール」の主な調律師でもある。

私たちは主役ではなく「黒子」
加藤さんは調律の専門学校で学び、就職してからはヤマハピアノテクニカルアカデミーの研修で腕を磨いてきました。「専門学校でヤマハ以外のいろいろなピアノに触れた経験は役に立ちましたが、就職して8年目に初めてアカデミーの研修に行った時は、そのすばらしさにカルチャーショックを受けました」という加藤さん。優れたカリキュラムによってこれまで自己流に頼っていたスタンダードがしっかりと身につく、これをきっかけに急成長。「次のステップのグラランドマスターコースは一つの壁で、特訓の洗礼を

「ピアノ不思議体験会」の小道具

部品交換などで不要となったピアノの部品をスタッフで集めておき、「ピアノ不思議体験会」で使用。子どもたちも触れて動かして大喜び。このイベントの目玉は、狂わせておいた音をチューニングハンマーを使って直す調律体験。



〔取材〕編集部 〔撮影〕山田ミユキ